

福井県の芸術文化分野(美術・書道・洋楽・邦楽・演劇・文学)

における歴史的観点から見た特徴的事項

(組織活動に着目した内容)

	(頁)
美 術.....	1
書 道.....	2
洋 楽	
合 唱.....	3
吹奏楽部門.....	4
室内楽・管弦楽部門.....	5
邦 楽.....	7
演 劇.....	8
文 学	
詩.....	9
俳 句.....	9
短 歌.....	10
川 柳.....	10
福井県ゆかりの文学者にちなんだ取組み.....	11

【美術】

大正期から昭和50年代にかけての約60年間活動した「北荘・北美」(北荘画会・北美文化協会)の美術運動がある。美術界の本流とは異なるフィールドでの新しい表現形態を持った作品が生み出された「北荘・北美」の運動は、地方における特異な美術運動として今も評価されている。

特に、初期の「北荘」からは、福井の洋画黎明期において重要な役割を果たした作家が多く輩出され、昭和23年(1948年)以降の「北美」からは、既成の表現にとらわれない個性的な作品が生み出されるとともに、若狭を拠点とする「若美」(若美作家協会)の美術運動も生まれた。

◆北荘画会

- ・ 北荘画会は、大正11年(1922年)、大正期新興美術運動の中心人物であった木下秀一郎の未来派論に賛同するかたちで、福井の土岡秀太郎を中心に堀田清治らによって北荘画会が結成された。
- ・ その後、北荘は、フォービズムや海外超現実主義の作品展を開催し、シュールレアリズム(超現実主義)をいち早く紹介。若い世代に衝撃を与え、前衛精神が受け継がれていったが、昭和12年(1937年)に活動を終える。

※未来派………20世紀初頭、イタリアを中心に起こった前衛芸術運動。近代文明の産物や機械の登場によって生まれた新たな視点を芸術に取り入れようとした。

※フォービズム……野獣主義；原色による強烈な色彩や激しいタッチを特徴とする。

◆北美文化協会

- ・ 戦後、北荘画会の伝統を受け継いで、昭和23年(1948年)に北美文化協会が設立された。設立会員は木水育男ら教育関係者が多く、創造美育運動と呼ばれる児童画教育運動を推進した。北美主催の夏期講習会には、阿部展也や岡本太郎等の日本の現代美術を切り開く作家とともに、毎回新鋭の美術評論家も招かれ、単に実技の講習だけでなく、広く現代美術の諸問題が討議され、これを通じて多角的に現代美術の動向をとらえることができた。
- ・ こうした活動を経て、個性的作品を生み出す作家を多く輩出する。八田豊、檀尾正次、山本圭吾、五十嵐彰雄らが個を貪欲に追及し、独自性のある表現を獲得し、全国的あるいは世界的にも評価される現代アート作家となり、現在も活躍している。

◆若美

- ・ また、昭和50年、「北美」の美術運動に参加した長谷光城の呼びかけにより、松宮喜代勝らが参画して若狭を活動拠点とする「若美」が結成され、新しく開かれた美術活動の確立を基本に、グループ展や美術講座、学習会等の活動を積極的に行い、マスコミ等でも高く評価された。

このように、近・現代における福井の美術を語る上で、「北荘画会」や「北美文化協会」の運動や、これから派生した「若美」の歴史的意義は極めて大きく、特に、「北荘・北美」の運動は、県内外で活躍する美術作家たちにも様々なかたちでその影響を見ることができ、その運動思想は現在も綿々と受け継がれているといえる。

◆美術の活動者人口

- ・ 本県の美術分野の活動者は、中学校・高校の部活動参加者が1,700人余り、趣味的活動者も含めた大学生以上の活動者が約1,200人程度で、合わせてほぼ2,900人余りである。
- ・ 社会人としての活動は、時間的余裕があることが前提となるので、退職者や子育てが一段落した主婦などが多く、高齢化がやや進展している。

【書道】

◆戦後の書道文化の動向

- ・ 戦後、中学校の書道の教員や書道教員をめざす福井大学の学生の中に、本県の書道教育や書道界のレベルアップを図りたいという気運があった。
- ・ そうした中、中央書壇や内地留学で実力をつけた教員や大学生を中心に書道団体を設立して公募展等を実施するとともに、書道教室を開設して書写・書道の普及活動を行うことにより、優れた指導者が育成されるとともに、書道人口も増加していった。
- ・ 一般的に昭和 20 年代・30 年代は生活もまだ豊かでなく、身近に楽しめるものも少ない中で、精神的な潤いや楽しみを求めて、若年層の特に多くの男性が書道に参加していった。こうした参加者の中から、現在の本県書道界の中心的存在・けん引役となっている指導者も生まれた。

すぎもとちやうん

◆杉本長雲と戦後書道界の発展

- ・ 戦後の本県書道界の発展において、当時福井大学教授であった杉本長雲の果たした役割は大きい。杉本は、流派へのこだわりを捨てて各派一致協力することが、書道文化の発展のためにまず重要と考え、リーダーシップを発揮しながら戦後の書道界をまとめていった。
- ・ 特に、昭和 25 年、県内 12 流派（無所属を入れて 13 派）が加盟する統括的な団体として福井県書作家協会が設立され、書道文化発展のための協力体制が整備されたこと、県書道教育研究会が設立され、県書道教育研究大会や県下学童競書大会等により、学校教育における書道教育の推進体制が整備されたこと、また、昭和 10 年に創設された「県かきぞめ競書大会(福井新聞社主催・若越書道会共催)」が、現在では県内の児童・生徒等による約 7 万点の応募がある一大公募展に発展し、子どもたちの書道の技術レベルの向上に大きく貢献していること、これら本県書道文化発展の礎は、杉本の尽力によるところが大きい。

◆中央書壇公募展等に見る高い書道レベル

- ・ 戦後、日展入選は遥かな彼方の目標と考えられていたが、昭和 27 年杉本長雲が入選。これが刺激となり、翌年からは後続を断たず、昭和 32 年には大量 12 名の入選という快挙もあった。
- ・ また、毎日書道展も権威ある公募展の 1 つであるが、昭和 28 年では漢字部門の特選入賞者合計 11 名中本県書道家が 6 名を占める本書道展始まって以来の記録的成績を打ち立てた。
本県書道家は、現在も中央書壇の有力公募展で入選・特選等の好成績を収めている。

◆本県の書風

- ・ 全国レベルの主な書道団体として 20 団体程度と言われる中で、特に有力な団体として毎日書道会と、毎日書道会から分裂してできた読売書法会がある。
- ・ 毎日書道会は関東系で自由・革新的な書風、対して読売書道会は関西系でやや伝統・保守的な書風と言われているが、本県の書道団体・書道家については読売書法会系が 6～7 割で、書風としては伝統的、保守的な部類に属する作品が多いようである。

◆書道人口の減少

- ・ 関係者に対する聴取り調査を総括すると、本県において書道教室に通うレベル以上で活動している書道人口は 3 万人弱で、そのピークは平成 7、8 年ごろであった。近年の減少傾向の要因は少子化もあるが、若年層の活動参加がほとんどなくなったこと、塾通いやスポーツ少年団への参加など子どもたちの課外活動の対象が広がったことなどが挙げられている。
- ・ 書道人口に関する全国比較のデータ等は見当たらないが、人口に対する活動者の割合が高い府県として、長野県、京都府、兵庫県が挙げられ、富山、石川、福井の北陸三県も比較的多いと言われている。

【洋 楽】(合唱部門)

◆福井県合唱連盟の誕生

- ・ 昭和 30 年、福井市民合唱団の指導者^{たなかこうじ}田中滉二の呼びかけにより、福井県合唱連盟が設立され、同年5月、第1回福井県合唱祭が開催され、前年に作られた福井県民歌の全員合唱も行われた。
- ・ 昭和 33 年頃から、合唱技術も次第に向上し、県合唱コンクールを設けて県代表選抜を行い、代表団体は中部合唱コンクールで優れた合唱を披露した。合唱祭は、大野、勝山、芦原、鯖江、武生、敦賀等の地域においても開催され、県内地域の音楽文化振興に大きく貢献した。

◆福井国体の開催、県高等学校文化連盟の誕生と高校部活動の活発化

- ・ 昭和 30 年代後半から高校合唱部の活動が盛んになり、昭和 43 年の福井国体開催に向けた高校生主軸の国体合唱団の編成などを契機に一層活発化した。
- ・ さらに、昭和 46 年には、福井県高等学校文化連盟（高文連）が誕生し、高文連の会長が県合唱連盟の会長に就任するなど、県連盟における高校部活動の存在が大きくなっていった。

◆県内各地での「第九」演奏と合唱活動の発展

- ・ 昭和 50 年代に入り合唱活動はますます盛んになり、昭和 56 年の春季合唱際には過去最高の 35 団体が参加した。
- ・ また、「第九」演奏会の活動が活発に行われ、福井公演の団員は、昭和 57・58 年には 300 人を超え、昭和 60 年には、敦賀・鯖江・福井で3日連続、別々の合唱団による「第九」演奏会が行われる快挙もあった。

◆コンクールに見る本県の高いレベル

- ・ 本県合唱活動の実力の向上は、コンクールの成績に客観的に現れており、特に、中学校のレベル向上がめざましい。以下は、ここ 20 年の全国コンクールの成績である。
- ・ 全日本合唱コンクール全国大会については、高校では、昭和 60 年に仁愛女子高等学校が銅賞を、中学校では、平成 4,5,10,13 年に成和中学校が銀賞や銅賞を、平成 14 年に三国中学校が銀賞を、平成 18 年に鯖江市中央中学校が金賞を、平成 19 年には福井大学附属中学校が銀賞を受賞している。
- ・ また、昭和 63 年に、TBS こども音楽コンクールで鯖江中学校が全国 1 位となり、平成 17 年には、^{あそうつ}麻生津小学校が同コンクール文部科学大臣賞奨励賞を、平成 18 年には、同校がNHK全国学校音楽コンクールの銀賞を、附属中学校が同コンクールで、平成 18,20 年に優良賞を受賞している。

◆中・高校における活動者の減少

- ・ 本県の合唱分野の活動者人口は、大学生も含む一般社会人が約 390 名、中学校・高校の部活動参加者が約 540 名で、合わせて約 930 名である。
- ・ 昭和 60 年前後から、中学・高校の部活動の参加者数が次第に減少し続けており、特に、男性の参加が急激に減少した。現在では、共学ながら男性部員がいない合唱部もめずらしくなく、現在の合唱活動における大きな課題となっている。

【洋 楽】(吹奏楽部門)

◆戦後の吹奏楽の動向

○福井国体の開催と吹奏楽の発展

- ・ 昭和 30 年、全日本吹奏楽連盟が設立され、翌年には中部日本吹奏楽連盟ができ、次に県域連盟の設立の働きかけが中部各県にあった。
- ・ 一方、戦後、中学校に新しく器楽教育が取り入れられ、県下中学校において次第に吹奏楽の活動の芽が育ち始めた。
- ・ こうした動きをベースに、昭和 34 年、福井市の^{せいわ}成和、^{めいどう}明道、^{しんめい}進明、^{こうよう}光陽、^{あすわ}足羽の各中学校、^{みかた}三方、^{かみなか}上中の両中学校に福井市消防音楽隊を加え、8 団体により福井県吹奏楽連盟が誕生した。
- ・ 昭和 36 年には、高校・中学校合わせて 12 校による県吹奏楽祭を開催、翌 37 年には全日本コンクールに成和中学校が初出場する等本県吹奏楽は次第に成長・発展していった。
- ・ 昭和 39 年頃には、平均して 20 名程度の編成によるバンドが、中学、高校、一般を含めて 47 団体設立され、各団体は楽器の購入と基礎練習に励み、その編成を大きくしていった。
- ・ その後、昭和 43 年開催の福井国体の式典等における吹奏楽団体出演の話が進み、昭和 40～41 年にかけて、数多くの講習会や練習会が開催され、また、県から各団体に多くの新しい楽器が配分される中で、各団体の技術水準が著しく向上した。

○県吹奏楽連盟への加盟状況

- ・ 福井国体の開催を契機に県内全域に普及した吹奏楽活動は、その後、中学校・高校の部活動を核として小学校にも浸透しゆき、一般のバンドも各地域で結成され、県吹奏楽連盟への加盟団体数は常に増加傾向を維持してきた。

《県吹奏楽連盟への加盟団体数の推移》

- ・ 昭和 53 年 (設立 20 周年時) 86 団体
- ・ " 63 " (" 30 ") 102 団体
- ・ 平成 10 " (" 40 ") 113 団体
- ・ " 20 " (" 50 ") 125 団体

◆コンクールに見る本県の高いレベル

- ・ 本県吹奏楽活動のレベルの高さは、コンクールの成績に客観的に現れている。
以下は、ここ 10 年の全国コンクール等の成績である。
- ・ 全日本吹奏楽コンクール全国大会については、中学校では、平成 15,16,18 年度に鯖江中学校が^{さばえ}銅賞を受賞し、高校では、平成 11,12,14,15,17,19 年度に^{たけふひがし}武生東高等学校が銀賞や銅賞を受賞。
一般では、平成 16 年度にソノーレ・ウインドアンサンブルが銅賞を、平成 20 年度にウインドアンサンブル・ソレイユが銀賞を受賞している。
- ・ また、全日本アンサンブルコンテストについては、中学校では、平成 11 年度に中央中学校が銀賞を、平成 14,15,16,18,19 年度に鯖江中学校が金賞や銀賞を、平成 14 年度に武生第二中学校が銀賞を、平成 18 年度に美山中学校在が金賞を受賞し、高校では、平成 11,12,15,18,19 年度に金賞や銀賞を受賞。
大学では、平成 10 年度に福井大学が銀賞を、平成 19 年度に^{じんあい}仁愛女子短期大学が銀賞を受賞し、一般では、平成 14 年度にソノーレ・ウインドアンサンブルが銀賞を受賞している。

◆増加傾向をたどる吹奏楽人口

- ・ 本県の吹奏楽分野の活動者人口は、大学生も含む一般社会人が 200 名強、中学校・高校の部活動が約 3,900 名で、合わせて 4,100 名余りで、今なお増加傾向にある。特に中学生、高校生の参加者が増えており、どの学校においても 5～10%の生徒が吹奏楽部に所属している。

【洋 楽】(室内楽・管弦楽部門)

◆戦後の室内楽・管弦楽の動向

[一般・大学]

○福井交響楽団

- ・ 昭和 62 年、浦井和美らの提唱により、福井室内合奏団、福井市交響楽団の発展的解消により、団員 100 名を擁する新しい福井交響楽団が設立。設立当時、県からの大型楽器購入等に対する支援や、その後、拠点施設として県立音楽堂の設置等もあり、毎年定期演奏会、特別演奏会等を行う大曲指向型のオーケストラに発展している。

[福井室内合奏団]

昭和 42 年、福井大学の中に、フルート奏者で常任指揮を務める浦井や福井大学フィルハーモニー管弦楽団で石黒硯二郎や棚池慶介の指導を受けた弦楽器奏者 15~16 名により福井室内合奏団が設立。バロックコンサートやクリスマスコンサート等の演奏会を開催し意欲的に活動した。

[福井市交響楽団]

昭和 49 年、大学のオーケストラとは別に、固定メンバーによるオーケストラの創設が望まれ、坪川健一氏を団長に福井市交響楽団(団員約 50 名)が誕生。毎年国内一流の演奏家の客演を迎えて定期演奏会を開始するなど意欲的に活動した。

○福井室内管弦楽団

- ・ 平成元年、清水八洲男の提唱により、主としてバロック、古典派の作品を研究する目的で設立。年 1 回の定期演奏会のほか、県内各地での出前コンサートや病院、図書館、美術館、小学校、幼稚園、保育園等を会場に小編成のアンサンブルによるコンサートを開催するなど活発に活動している。

○福井大学フィルハーモニー管弦楽団

- ・ 昭和 31 年頃に設置。当時高校教員であった石黒らの指導により活動が始められた。以降、毎年定期演奏会を行うなど 50 年以上の活動歴がある。

○福井大学医学部管弦楽団

- ・ 平成元年、福井医科大学管弦楽団として設立。同大学と福井大学との合併により名称変更。毎年定期演奏会を行っている。

[高校]

○丹生高校オーケストラ部

- ・ 昭和 43 年に、清水逸之が設立。本県で最も古い高校オーケストラ

○武生高校オーケストラ部

- ・ 昭和 58 年に、同校に異動した清水逸之が設立

○藤島高校弦楽部

- ・ 平成 7 年に、清水八洲男が設立

○高志高校弦楽部

- ・ 同好会からの昇格により平成 15 年に設立

[ジュニア]

○福井ジュニア・オーケストラ

- ・ 昭和 54 年、国際児童年を記念し、福井の音楽文化の向上と若い世代の育成を目的に、県内唯一の本格的な子どもオーケストラとして福井ジュニア・オーケストラが設立された。
- ・ 昭和 57 年には、ウィーンモーツァルト少年少女合唱団福井公演に特別出演する等の活動を行ったが、その後、諸事情により解散した。

◆国民文化祭の開催と福井県オーケストラ連盟の設立

- ・ 国民文化祭・ふくい 2005 の前年、平成 16 年に、県内のオーケストラ部門の統括的団体として福井県オーケストラ連盟が設立された。
- ・ 同祭では、当該連盟が主体となって、以下の各部門合同でオーケストラの祭典を実施
高校部門（藤島、高志、武生、丹生の 4 校合同）
大学部門（福井大学フィルハーモニー管弦楽団を中心に北陸各県からの参加者で構成）
一般部門（福井交響楽団、福井室内管弦楽団に加えて他県からの参加者で構成）
- ・ 連盟は、国民文化祭の後、目立った活動は行っていない。

◆弦楽器人口の不足

- ・ 本県の管弦楽の活動者人口は、一般・大学が約 200 名、高校生が約 100 名である。
- ・ このうち、弦楽器奏者は、一般・大学が約 110 名、高校生が約 80 名であるが、本県は、弦楽器人口が少なく、オーケストラの要である弦楽器について、質量ともに確保できていない状況にある。

このため、全県的に弦楽器奏者の育成が課題となっている。

【邦 楽】

邦楽は、雅楽、箏、三味線、尺八、長唄、能楽・狂言の囃し方等様々な部門があるが、ここでは、県民の参加者が最も多い三曲（箏・三味線・尺八）を中心にまとめた。

◆戦後の邦楽活動の動向 ～福井県邦楽連盟の創設～

- ・ 昭和 25 年、県教育委員会 2 周年記念と題した邦楽鑑賞大会の出演者から、各流派合同の演奏会を持つことが各流派に刺激を与え演奏会にも変化を与えることとなるから、邦楽家の横の連携を保ちうるような組織がほしいとの要望があった。
- ・ この要望を踏まえ、県文協などが中心となって福井県邦楽連盟が結成され、各流派合同演奏会が開催されるようになった。合同演奏会の参加団体数増加により、2 日間開催や昼夜連続開催、年 2 回開催等の工夫が講じられたのは、戦後の邦楽活動発展の表れの 1 つとして考えられる。しかし、本連盟は昭和 30 年代後半に、諸事情により自然消滅した。

◆福井県三曲協会と福井県三曲会

- ・ 昭和 40 年に、本県三曲部門の横断的な組織として県三曲会が設立されたが、昭和 40 年代の後半から活動が停滞し休眠状態にあったものを何とか復活しようと昭和 52 年 9 月に再発足し、翌年、「福井県三曲協会」と改称し、定期演奏会、研究会、講習会等を重ねる中で、会員の技術向上が図られている。
- ・ また、昭和 53 年 4 月には、都山流、生田流宮城社、生田流正派邦楽会および諸派が集まり「福井県三曲会」を設立。箏、三絃、尺八、十七絃の各流派が、毎年 1 つの舞台上、全員で大合奏を繰り広げることにはほかに類例がないことであり、本県が全国に誇れる画期的な活動となっている。

◆邦楽人口の減少と子どもたちの邦楽活動への参加

- ・ 本県の邦楽分野の活動者人口は、大学生も含む一般社会人が約 1,400 名、高校の部活動参加者が約 130 名で、合わせて約 1,530 名である。
- ・ 本県邦楽界全体としては、若年層の参加者が減少し高齢化が進み、円滑な世代交代が 1 つの課題となっている中、日本の伝統の音を次代に伝えるため、子どもたちの邦楽活動への参加を積極的に進めている団体もある。
- ・ 一例として、昭和 27 年設立の越前市に拠点を置くアララギ楽苑^{がくえん}では、4、5 歳児から中学生まで約 20 名の子どもたちが楽しみながら練習・発表活動を行うとともに、市内の丈生幼稚園、味真野小学校、花筐^{かきょう}小学校、南小学校の箏クラブの指導を行ったり、幼稚園児、小中学生を対象とした体験学習の中で広く和楽器の楽しさを体験してもらう活動を続けており、本県の邦楽文化の継承・発展にとって貴重な役割を担っている。

【演 劇】

◆戦後の演劇文化の動向

- ・ 戦後、本県の演劇は、NHK 福井放送局の放送劇で活動した「福井アンテナクラブ」に始まる。当時放送部長であった高野国本たかのくにもとの指揮の下、坪川健一つぼかわけんいち脚本の連続放送劇で活躍。その後、舞台劇進出という高野の強い意向により、「福井アンテナクラブ」を母体に「劇団福井自由舞台」が誕生。現在も本県演劇界の中核を担う劇団となっている。

◆宇野重吉の帰郷・滞在と演劇レベルの向上

- ・ 昭和 46 年、本県出身の宇野重吉が帰郷滞在し、福井の演劇人を結集した作品を上演することとなり、「福井自由舞台」・「福井劇の会」・「福井青年劇場」の合同で毎晩のように稽古が行われた。作品は、県と福井市が助成する演劇の里事業として上演された。
- ・ 演劇の里事業は、劇団合同公演や創作バレエとの共演、演出・演技・照明技術等の講習会など、当時画期的な内容で昭和 49 年まで続けられ、演劇分野の技術レベルの向上に大きく貢献した。

◆福井県演劇連盟の設立

- ・ 越前市での演劇講習会開催を契機に県内の演劇グループが結集し、平成 4 年に福井県演劇連盟が結成された。平成 7 年、仁愛女子高校 OG による「劇団Jin」じんを中心とした 8 劇団合同公演で反響を呼び、また翌年、ハートピア春江はるえを会場に全国アマチュア演劇大会福井大会を開催するなど、横のつながりによる活発な活動を展開し、本県演劇文化の発展を推進している。

◆平成以降近年の小劇場志向

- ・ 平成 3 年頃、老人介護など問題提起的な創作劇や前衛的な作品に取り組む劇団も現れ始め、現在は、大作や人気劇を大規模会場で上演するより、演じる側がやりたい劇を“アトリエ”や“小屋”と呼ばれる小劇場で上演する中で個性を追求する劇団が増える傾向も見受けられる。

◆子ども演劇部門の活躍

- ・ ミニ劇場や演劇ワークショップで活動の幅を広げる大野市の「劇団チャップス」、地元旧美山町の民話劇を上演する「みやま木ごころ一座」、旧今立町内の小・中・高校生が毎年ミュージカル公演を行う「いまだて子どもミュージカルステラ座」、寄贈された大阪道頓堀中座の緞帳などを活かして行う「まるおか子供歌舞伎」など、活発な活動を行う子ども参加の劇団もある。

◆演劇分野の活動者人口

- ・ 本県の演劇分野の活動者人口は、大学生も含む一般社会人が約 170 名、中学校・高校の部活動参加者が 190 名余りで、合わせて約 360 名である。
- ・ 演劇分野の活動者人口は、ここ 5 年間は横ばいであるが、どの劇団も慢性的な団員不足であり、また、若年層の参加が少なく、世代交代と後継者確保が最大の課題となっている。

【文 学】

詩

のりたけかずお

◆則武三雄の詩と北莊文庫

- ・ 則武三雄は明治 42 年米子市の生まれ。終戦後間もなく三国町に滞在中の三好達治を訪ねて師事し、後に福井市に移住して文学活動を開始。昭和 26 年に「北莊文庫」を創設し、自身の詩集や県内詩人の詩集等を出版して本県詩人を支援。本県詩文化の発展に貢献し、県内外で注目された。

◆「木立の会」の活動

- ・ 昭和 43 年、ひろべえいち 広部英一を代表に、おかざきじゅん 岡崎純、みなみのぶお 南信雄、かわかみあすお 川上明日夫によって「木立ちの会」が発足し、詩誌「木立ち」が創刊。北陸の風土や生活に根ざした定住者の文学を目指した同誌には、多くの優れた福井在住詩人の参加があり、“福井抒情派”などと呼ばれ、全国的に高く評価されている。

◆全国規模での活躍と荒川洋治

- ・ 昭和 50 年代には、本県詩人が全国的にも評価されるようになり、「木立ちの会」の詩人をはじめ全国的に権威ある詩賞を受賞する者も現れた。
- ・ そうした中、三国町生まれの荒川洋治が新しい詩の世界と積極的な問題提起で注目され、全国規模で活躍。昭和 51 年、詩集「水駅」で H 氏賞を受賞。以後、多くの詩集や随筆、評論を発表し、高見順賞、読売文学賞、萩原朔太郎賞、小林秀雄賞等を受賞。現代詩の第一人者となった。

◆「福井県詩人懇話会」の誕生

- ・ 昭和 60 年、詩分野の県域連盟として「福井県詩人懇話会」が設立。県内の全同人誌が参加し、個人的に活動する人や愛好者等も広く参加可能な開かれた団体として活動。岡崎純を代表に、年刊「ふくい詩集」の発行、「ふくい詩祭」の開催等の活動を通じて本県詩文化の発展を推進している。

俳 句

◆戦後の俳句文化の動向

○伊藤柏翠と俳句誌「花鳥」の復刊

- ・ 戦後の本県俳壇は、昭和 20 年から三国町に住む「ホトトギス」同人の伊藤柏翠の俳句誌「花鳥」の復刊（戦前は療養先の鎌倉で発刊）に始まる。
- ・ 「花鳥」は、戦後、本県の伝統俳句の発展に大きく貢献。平成 8 年には、全国展開を目指して東京に発行所を移し文字通り全国俳句誌となった。平成 10 年当時で県内会員数 250 名、県外 820 名、県内の系列句会の数は 23 句会にも及び、伊藤は多くの優秀な俳人を生み出したが平成 11 年に死去。柏翠の句碑は全国に建立されている。

○公民館教室による俳句の発展

- ・ 昭和 24 年頃から国が社会教育を推進し全国に公民館が普及。福井市の各公民館が俳句教室の開設に取り組み始めた頃、まきたうえんじゅ 牧田雨煙樹やいしかわぎんえいし 石川銀栄子らが集まり、各派を超えて俳句に関心のある人が気軽に参加できる句会を公民館活動として開設することで意見がまとまり、「福井市民俳句会」が設けられた。5・7・5 の定型派と自由律の人が合同で 1 つの句会を開くことは全国でもめずらしく画期的な出来事であり、その後の公民館教室による俳句の普及発展に大きく貢献した。

◆「福井県俳句作家協会」の設立

- ・ 昭和 33 年、県下俳壇の団結について意見が交わされ、「福井県俳句作家協会」が設立された。以来 50 年にわたり、春秋 2 回の県下各派合同俳句大会の開催や各派合同句集「福井県」の発行等、公民館等における俳句教室の発展と併せて、本県俳句文化振興の基礎を築いてきた。

◆県 4 団体による俳句文化の振興

- ・ 平成 5 年に「福井県現代俳句協会」が、平成 6 年に「俳人協会福井支部」と「日本伝統俳句協会福井部会」が、中央の主要 3 団体の支部組織としてそれぞれ設立され、前述の「福井県俳句作家協会」の活動と併せて、本県の俳句文化の振興・発展を推進している。

短歌

◆戦後の短歌文化の動向

○短歌誌「^{ひいらぎ}柎」と「^{ひやくじつこうしゃ}百日紅社」

- ・ 戦後、本県の短歌界において主流をなしてきたのは、北陸アララギ会を母体とする「^{つじ}柎」と辻森秀英を主宰とする「百日紅社」である。

「柎」は、正岡子規門下生による中央同人誌「アララギ」の地方誌として平成4年に創刊。戦後、昭和21年に復刊第1号を出版。本県出身の「アララギ」同人吉田正俊が平成5年に他界するまで選者を務めた。創刊当時約100名の会員は、現在200名を超えている。

- ・ 昭和22年に、早稲田大学での窪田空穂の教え子で本県に疎開中の辻森と若山牧水系の伊藤二三雄らが中心となり「百日紅社」を創設。清新な抒情と自由な歌風が若い世代の共感を呼び、会員が増加した。創刊当時25名の会員は、現在約90名となっている。

◆福井県短歌人連盟の設立

- ・ 昭和30年、福井県文化協議会主催の短歌大会が各派合同組織設立の気運を高め、昭和32年、福井県短歌人連盟が設立。現在に至るまで、毎年春・秋2回の総合短歌大会と橘曙寛忌短歌大会を行うほか、毎年自選歌集を刊行し、本県短歌文化の発展を推進している。

川柳

◆戦後の川柳文化の動向と番傘ばんば川柳社の創設

- ・ 本県の川柳界は、敦賀生まれの舟木夢考が、大正6年、源田琴波らと「汽笛川柳会」を創設、柳誌「汽笛」（その後「かもめ」に改名）を創刊したことに始まる。
- ・ 一方、福井では、昭和27年、川崎銀甲らが敦賀の川柳界の協力を得て「福井番傘川柳会」を創設、柳誌「福ばん」を発行。その後、誌名を「ばんば」（雪国の除雪用民具ばんばより命名）と改め、敦賀と福井が車の両輪となって福井県川柳界をリードした。
- ・ 死去した舟木の遺志により、昭和37年、県内の各川柳社が統合し、番傘ばんば川柳社を創設。敦賀の柳誌「かもめ」と福井の「ばんば」を併合して「ばんば」を継続発行。本県川柳界の大同団結が成り、全国にも稀な川柳界の一大結社が誕生。現在も本県の川柳文化発展を推進している。

共通事項

◆短詩型文学の活動者人口の減少

- ・ 現在、詩・短歌・俳句・川柳の短詩型文学の新たな活動参加者は、概して定年退職者層を中心に、昭和20・30年代に見受けられた教師の影響による高校生の参加や若年層の参加はほとんどない。高齢化・後継者不足が共通した状況といえる。
- ・ 活動者数については、詩と俳句が横ばい状態。川柳は昭和35年頃、短歌は平成10年頃をピークに減少してきている。

◆短詩型文学への子どもたちの参加

- ・ 本県の短詩型文学の活動者数については、詩・短歌・俳句・川柳合わせて約2,600人である。
- ・ 円滑な世代交代と後継者確保のためには、子ども対象に普及を図る機会が必要であるが、様々な情報、感情等を巧みに短文化し表現できるメール世代の今の若者こそ、感覚的に短詩型文学の世界と共通する部分を潜在的に有しており、この点で後継者育成の可能性を示唆する活動者もいる。

本県ゆかりの文学者等にちなんだ取組み

◆^{かざはなずいひつぶんがくしょう}風花随筆文学賞

- ・ 津村節子氏の随筆「^{かざはな まち}風花の街から」にちなんだ名称を冠した全国公募の随筆文学賞
仁愛女子短期大学に「津村節子文学室」が開設されたのを機に、平成9年度、同学に創設。同学国文学科廃止に伴い、平成14年度から「風花随筆文学賞」実行委員会を設立して実施している。
- ・ 一般の部・高校生の部を合わせて県内外から約4,000点を超える応募がある。

◆新一筆啓上賞

- ・ 丸岡町文化振興事業団が実施する日本一短い手紙文の全国公募のコンクール
- ・ 同町にゆかりのある徳川家康の忠臣^{ほんだしげつぐ}本多重次が陣中から妻にあてて送った手紙「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」にちなむもの。「お仙」とは、後の越前丸岡藩主^{ほんだなりしげ}本多成重(幼名仙千代)のこと。平成20年度で第6回を数え、応募数は通算100万を超えた。

◆^{へいせいどくらくぎん}平成独楽吟

- ・ 本県出身の歌人橘曙覧が詠んだ独楽吟にちなんだ全国公募の短歌コンクール
「楽しみは～」で始まり「～とき」で終わる独楽吟形式の短歌を「平成独楽吟」として募集している。
- ・ (財)歴史のみえるまちづくり協会(福井市役所内)が実施し、一般短歌と合わせて毎年約4,000点の応募がある。

◆万葉の里短歌募集・あなたを想う恋の歌

- ・ 奈良時代、味真野に流された中臣朝臣宅守(なかとみのあそみやかもり)と都で宅守を想う妻の狭野弟上娘子(さののおとがみのおとめ)が交わした63首の相聞歌^{そうもんか}にちなんだ全国公募の恋の歌(短歌)コンクール
- ・ 万葉の里・恋のうた募集実行委員会(越前市文化センター内)が実施。毎年15,000点以上の応募がある。

◆鯖江人形浄瑠璃「近松座」

- ・ 浄瑠璃作家として元禄文化を築いた近松門左衛門が、本県鯖江市立待吉江^{たちまちよしえ}で幼少期を過ごした史実を基に、地元の人形浄瑠璃劇団を立ち上げ、平成17年、「第20回国民文化祭・ふくい2005県民自主企画事業」として公演が実現し、継続が図られている。

◆竹人形文楽「越前竹人形」

- ・ 本県おおい町出身の作家^{みずかみつとむ}水上勉の蔵書約2万冊等を所蔵する「若洲^{じやくしゅう}一滴文庫^{いつてきぶんこ}」で上演される「若洲人形座^{じやくしゅうにんぎょうざ}」による竹人形文楽「越前竹人形」。昭和61年に旗揚げされ、毎年おおむね2回の公演を行い、四半世紀近くになる。